

「クロアゲハ幼虫騒動(3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

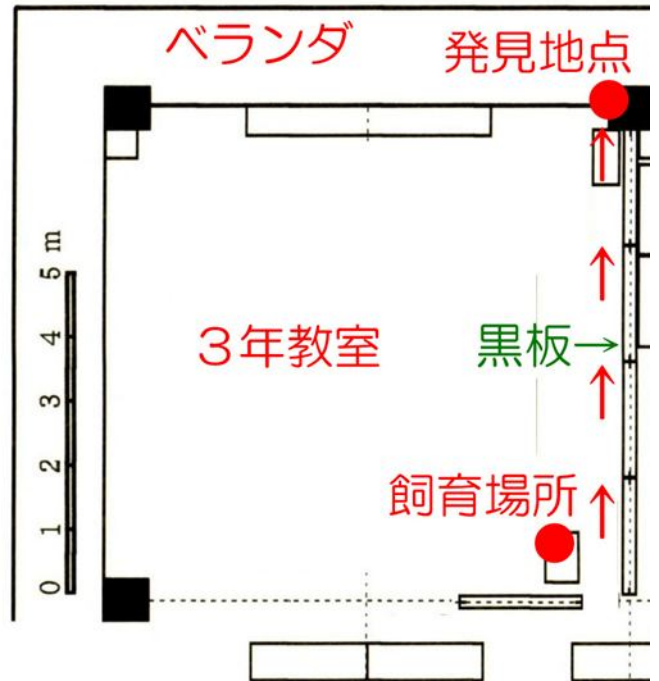
クロアゲハの前蛹(ぜんよう)が発見されたのは、運動会の学年練習日の朝だった。どのクラスも、着替えや準備で忙しかったが、騒ぎを聞きつけた他のクラスの子どもたちも、大勢「見学」に来た。こうした探究心は嬉しいことだが、蹴飛ばされたらアウトなので、ベランダとの通路は、テープを張って「通行禁止」とした。子どもたちは顔を近づけて観察していた。



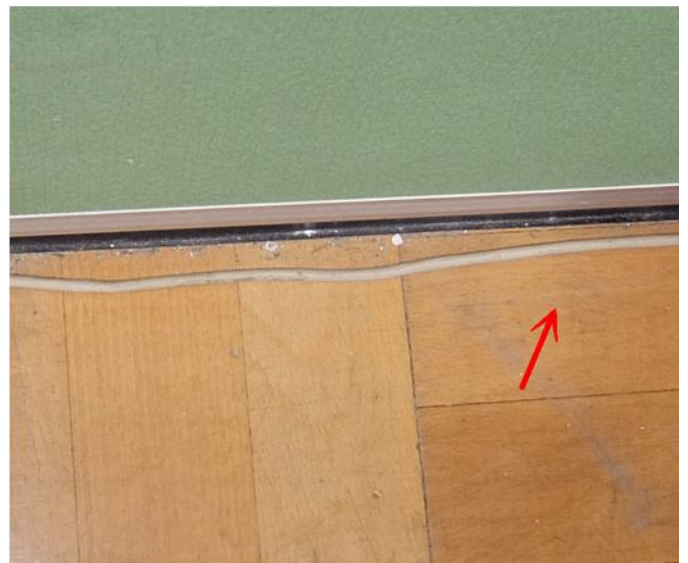
「あれ?このサナギ、何か真っ白なんだけど・・・」
「ホントだ!粉かぶってる。幼虫が出したのかな?」



確かに全身真っ白である。特に腹側に白い粉がたくさん付着している。どうやら幼虫自身が分泌したのではなく、移動中に付着したもののようだ。



幼虫を飼育していた場所(私の教師用机の脇)から、前蛹が発見されたベランダ出口までは、約7メートルある。蛹化直前のクロアゲハの終齢幼虫はかなり大きいですが、前進速度は相当に遅いので、数時間かかったと思われる。机から降りるのも大変だっただろう。(降りたのではなく、落下した可能性もある)



黒板の下をよく観察すると、床に落ちたチョークの粉の上に、うっすらと幼虫が這った跡が残っていた。(写真ではわかりにくい) 子どもたちは、小さな幼虫が、安心してサナギになれる場所を探して、「長距離」の旅をした幼虫の行動に感動していた。

前蛹は、糸を張って壁にしがみついている姿は、サナギに近いが、実はまだ幼虫である。この状態から、器用にもう一度脱皮して、正式なサナギになる。皮を脱ぐ時に、このチョークの粉もとれるだろう。